中国文化大革命期における 日本映画シナリオの翻訳

Chong ZHANG (張冲 : Associate Professor, Ludong University)

✉ zhangchong1217@yahoo.co.jp

(中国) 魯東大学外国語学院日本語科准教授。日本文学、中日比較文学研究。「谷崎潤一郎『お国と五平』の中国語翻訳—田漢による戯曲翻訳の手法と構想」(神戸：『水門 言葉と歴史』第26号、勉誠出版、2015)、「田漢早期電影对谷崎潤一郎早期文学的接受研究—以『湖边春夢』為考察対象」(北京：『北京電影学院学報』2014年第5期)など。

Translation of Japanese Movie Scenarios During the Cultural Revolution of China

In the latter part of the Cultural Revolution, Japanese movie scenarios were translated. The 15 translated films about the reality of Japanese society were newly produced at the time. Many of them were produced by social directors closely related to China and recommended by the Kinema Junpo editorial department. The intensive translation of the Japanese movie scenarios was due to the normalization of diplomatic relations between China and Japan, the deterioration of Sino-Soviet relations, the political situation in China, and the diversification of Japanese movies. The translation inherited the attention paid to social directors before the Cultural Revolution and promoted the Japanese Movie Boom in the latter part of the period.

Keywords The Cultural Revolution of China(文化大革命期), Japanese Movie Scenarios(日本映画シナリオ), Translation(翻訳), Social directors(社会派監督), Japanese Movie Boom(日本映画ブーム)

中国の文化大革命期(以下「文革期」と略称)には、資本主義批判というイデオロギーの影響で翻訳文学が大きな影響を受け、低迷期に陥ってしまったとされている。しかし、実際は完全な「空白」ではなく、文革の後期には映画シナリオの翻訳が行われていた。文化大革命前には、翻訳は、小説、詩、散文に集中していたが、文革後期に日本映画シナリオという新しいジャンルに及んだという点は留意すべきであろう。

文革期に翻訳された映画シナリオを調査したところ、確認できたのは15本である。これらの映画は内部で刊行した¹専門雑誌『摘訳・外国文芸』及び3冊の脚本集に載せられている。本稿では、その特徴と歴史的背景を分析し、文革期日本映画翻訳活動の歴史的な位置づけを明らかにしていきたい。

1 シナリオの翻訳

文革期に翻訳された日本映画シナリオは15本であり、すべて内部で発行されていた。刊行物は『摘訳・外国文芸』²『砂の器・望郷：日本電影劇本』³『故郷—日本的五個電影劇本』⁴『反華電影劇本「デルス・ウザーラ」』⁵である。

『摘訳・外国文芸』(以下『摘訳』と略称)は1973年に上海で創刊された専門雑誌で、1973年から1976年にわたって、総計31期(9期の増刊を含む)刊行された。毎期の発行部数は約1万5千冊で、日本文学に限らず、多くの外国文学を幅広く翻訳・紹介した。文革期の代表的な文芸雑誌として、『摘訳』は「ソ修」の文芸作品を数多く掲載した。文芸を通じてソ連、アメリカ、日本などの社会状況を把握し、「反帝反修」⁶「資産階級批判」の情報源として使用することが目的であった。『摘訳』だけでなく、『反華電影脚本「デルス・ウザーラ」』など3冊の脚本集も同様の目的で出版されたものである。

日本映画の翻訳は文革後期(1973年-1976年)に集中している。翻訳された15本の映画を見ると、ほとんどが当時の日本(1972-1975)で制作されたばかりの作品で、映画の時代性を重視したことがわかる。(具体的な映画は付表を参照)

2 翻訳の特徴

文革期に翻訳された日本映画シナリオは内容が豊かであるが、共通する特徴も見られる。

第一に、何らの形で中国と関係を持っている社会派監督の作品がほとんどであることだ。翻訳された日本映画シナリオ15本の中で、11本は今井正、山本薩

1 「内部発行」とは、一定の研究価値があるが、正式に出版するには適切ではないため、特定の読者を中心に配布される書物や雑誌を指す。

2 『朝やけの詩』『華麗なる一族・第一部』『華麗なる一族・第二部』『ノストラダムスの大予言』『小林多喜二』『わが道』『金環蝕』の7本を掲載。

3 『砂の器』『サンダカン八番娼館 望郷』の2本を掲載。

4 『故郷』『あゝ声なき友』『男はつらいよ』『忍川』『約束』の5本を掲載。

5 『デルス・ウザーラ』の1本を掲載。

6 「ソ修」は「ソ連修正主義」、「反帝反修」は「反帝国主義反修正主義」の略語である。中国は1960-1970年代、ソ連を修正主義的であると批判した。

夫、熊井啓、新藤兼人、山田洋次の作品で、いずれも日本で社会派映画として高く評価されている。日本の社会派映画は、1940年代に興り、50、60年代に最盛期を迎えた。当時の社会背景の中に物語を置き、資本主義社会と労働者階級の苦難を中心として批判的に描いている。今井正⁷、山本薩夫⁸、新藤兼人⁹らの作品は文革前から継続的に中国で上映され、中国の視聴者たちによく知られていたのである(文革前に中国で上映された作品は脚注を参照)。また、山本薩夫監督は1961年に中国を訪問し、中国の映画人と交流したことがあり、熊井啓は1971年に戦後の日本映画で初の中国ロケを実現するために、中国を訪れたことがある。

第二に、翻訳された日本映画シナリオの選択は主に『キネマ旬報』のランキングに依拠したものである。『キネマ旬報』は、1919年7月に創刊した、キネマ旬報社主宰の映画雑誌である。「キネマ旬報ベスト・テン」は、毎年映画評論家や新聞記者、映画雑誌編集者などから選抜した120人前後の選考委員によって受賞映画が選出されるため、信頼できるものと評価されている。文革期に翻訳された日本映画の多くは「キネマ旬報ベスト・テン」から選ばれた作品であるが、それ以外の作品もある。『朝やけの詩』『デルス・ウザーラ』『ノストラダムスの大予言』の3作品である。この3作品は、「キネマ旬報ベスト・テン」には入っていないが、『キネマ旬報』の表紙・巻頭に登場している。つまり、ベスト・テン受賞作品、表紙・巻頭掲載作品、両方とも『キネマ旬報』が推薦する優秀な作品だと言えるだろう。したがって、日本映画の翻訳選択基準として、『キネマ旬報』の推薦作品が大いに参考されたのではないかと考えられる。

第三に、翻訳された日本映画は客観的に物語を語るという印象が強く、特定のイデオロギーを押し付ける内容ではない。この特徴は同時期に翻訳された小説、演劇と比べると明らかである。『摘訳』に掲載された日本小説の半分は日本共産党系雑誌『文化評論』『新日本文学』『文芸戦士』などから訳出されたものである。また、日本の共産党系劇団はぐるま座の劇『春雷』『沖縄の怒り』も載せている。しかし、本稿で取り上げている15本の翻訳された日本映画はどれも内容の客観性を重視し、特定の政治理念、宗教概念を含んでいない。ちなみに、文革期にもっとも大きな注目を集めた日本小説の翻訳といえば、三島由紀夫と小林多喜二の作品があげられる。三島由紀夫の作品は「軍国主義批判」を目的として訳されたのに対し、小林多喜二はプロレタリア文学の代表として翻訳されたのである。

文革期に翻訳された日本の映画は、中国と深い関係のある社会派監督が制作し、キネマ旬報編集部が推薦する、日本社会の現実を描いた作品が多い。すなわち日本社会を知るには最適な映画が選ばれたのであろう。

7 1954年に『どこいいてくる』、1956年の「日本映画祭」で『あいすればこそ』(共同監督)『ここに泉があり』、1957年の「アジア映画祭」で『米』が上映された。

8 1954年に『箱根風雨録』、1956年の「日本映画祭」で『太陽のない街』『あいすればこそ』(共同監督)、1957-58年に『日の果て』『浮草日記』、1962年に『松川事件』が上映された。

9 1957-58年に『縮図』『狼』、1962年に『裸の島』が上映された。

3 時代的背景及び原因

このような日本映画シナリオが翻訳された理由として、当時中国の国際関係及び、日本映画の発展が考えられるのだろう。

第一に、日本映画シナリオ翻訳の背景には、中国とソ連、中国と日本の国際関係が絡んでいる。当時中国とソ連は険悪な関係になりつつあった。故に、1970年代の中国は「反ソ反修」の外交姿勢を取っていた。そこで宣伝手段として、このような内容の映画が選ばれたのである。黒澤明監督のソ連映画『デルス・ウザーラ』、新藤兼人監督の『わが道』は「ソ修」にかかわる映画として翻訳された。「ソ連映画『デルス・ウザーラ』の醜悪な企図」¹⁰「新藤兼人の道とソ修裏切り者の陰悪心」¹¹を題とした批判文章が書かれ、「内部発行」されたのである。

中ソ関係とは違って、中日は1972年の中日国交正常化を起点として、友好関係を築き始めたため、両国間の文芸交流も活発になってきた。1973年から1976年に翻訳された日本映画シナリオは回復した中日関係の現れだと言えよう。

第二に、日本共産党系の雑誌や新聞への注目である。『文化評論』は日本共産党中央委員会を発行元として創刊された総合雑誌である。「日修」¹²雑誌と評されていたが、この雑誌は日本の共産党に近い進歩的な文化人たちに発表の場を提供していたため、自然に中国側の注目をひくようになったのであろう。映画『あゝ、声なき友』『忍ぶ川』『男はつらいよ・柴又慕情』と『小林多喜二』のシナリオはいずれも『文化評論』において紹介されたことがある¹³。

『文化評論』以外に、はぐるま座の機関誌『文芸戦士』、日本共産党左派の機関紙『人民の星』も翻訳の際、特に参考にしたものだと考えられる。『文芸戦士』『人民の星』に発表された評論を直接翻訳したのが、「日本映画はどこへ向かう」¹⁴、「勝山俊介作シナリオ『小林多喜二』を批判」¹⁵である。これらの評論の中に、山本薩夫、今井正、熊井啓、山田洋次、新藤兼人、勝山俊介6人の名前があがっている。その後、彼らの作品は中国で翻訳されることとなった。

第三に、1970年代日本映画の内容とその発展が、文革期の日本映画翻訳に影響を及ぼした一因として考えられる。日本映画は、1950-60年代が全盛期だと言われている。1970年代は黄金時代の残り火でありながら、より個性的で、職人的な鬼才監督が多く現れた。したがって、この時期、低予算で制作可能な独立プロによる映画の躍進が著しい。自主映画ブームを迎え、映画多様化時代に入る兆しだといえる。当時の中国の編集者はこのような多彩な映画の中から、様々なジャンルの日本映画を翻訳した。中国の読者たちにより多樣的、具体的、客観的に日本社会を見せようとしたのではないかと考えられる。

¹⁰ 『デルス・ウザーラ』研究会「蘇聯影片『德尔・蘇・烏扎拉』的醜惡企圖」(『反華電影劇本「デルス・ウザーラ」』北京：人民文学出版社、1975)、pp.166-170。

¹¹ 上鋼三蔵、梁贊魯「新藤兼人の道路和蘇修叛徒的陰惡用心」(『摘訳・外国文芸』、1976年第2期)、pp.88-91。

¹² 「日修」は「日本修正主義」の略語である。

¹³ 林冬子「あゝ、声なき友」(松竹)(『文化評論』1972(131))、山田和夫「忍ぶ川」(東宝・俳優座提携)(『文化評論』1972(132))、玄間太郎「男はつらいよ・柴又慕情」(松竹)(『文化評論』1972(133))、勝山俊介「小林多喜二(シナリオ)」(『文化評論』1973(148))

¹⁴ 吉川徹也「日本電影向何処去」廖望訳(『摘訳・外国文芸』、1973年第2期[初出：吉川徹也『文芸戦士』第35期、1971年4月1日])、pp.117-118。

¹⁵ K「批判勝山俊介著電影劇本『小林多喜二』」(『摘訳・外国文芸』、1975年第5期[初出：K『人民之星』、1973年12月7日])、pp.9-15。

4 歴史的 위치づけ

文革期に中国の文芸活動がほぼ停止し、空白が続いたのは事実である。しかし、量的には少ないが、継続的に行われた日本映画シナリオの翻訳は承前啓後の役割を果たした。その意義について以下にまとめられる。

第一に、文革後の日本映画ブームと中日友好関係のために基礎を築いたことである。文化大革命が終わって、1978年に鄧小平氏の訪日後、中国では「日本ブーム」が起こった。「日本映画祭」を媒介として、1978年から日本映画は中国に上陸しはじめ、空前のブームを迎えた。当時中国で大ヒットした作品を見ると、すでに文革期にそのシナリオを翻訳された映画が多い¹⁶。また、文革期に作品を翻訳された監督の新作も多く入っている¹⁷。即ち、文革期の作品及び監督の選択基準を参考に、文革後に映画が輸入、上映されたのだとも考えられるであろう。

第二に、文革後の中国映画発展に深い影響を及ぼしたことである。山本薩夫、熊井啓、山田洋次は文革後、何度も中国を訪れ、中日の映画交流・発展に力を尽くした。このような文化交流が、後に世界で高く評価される中国の監督たちに刺激を与えたのである。張芸謀監督は「日本映画は北京映画学院で勉強していたころの自分に深い影響を与えた」¹⁸と語っている。具体的に挙げた映画に『望郷』『砂の器』『華麗なる一族』『金環蝕』『男はつらいよ』などがあり、これらは文革期にすでに翻訳された作品である。

文革後期に日本映画シナリオが集中的に翻訳されたのは、中日国交正常化、中ソ関係悪化、中国国内の政治状況及び日本映画の多様化などによるものとも言える。こうした翻訳は当時の時代背景、イデオロギーに影響されながらも、文革前の社会派監督との繋がりを保ちつつ、文革後の「日本映画ブーム」を促す一役を買ったことは評価すべきであろう。

16 『望郷』、『金環蝕』、『華麗なる一族』、『砂の器』の4本があげられる。

17 山本薩夫監督『金環蝕』、『華麗なる一族』は1979年に、『あゝ野麦峠』『アッシイたちの街』は1980年に上映された。熊井啓監督『望郷』は1978年に、『お吟さま』は1979年に上映され、山田洋次監督『遙かな山の呼び声』は1980年に、『男はつらいよ 望郷篇』は1982年に上映された。

18 劉文兵『日本電影在中国』（北京：中国電影出版社，2015），pp.180.

付記 本稿は、中国国家社会科学研究重大課題「近代以来中日文学関係研究と文献整理(1870-2000)」(17ZDA2777)による研究成果の一部である。

付表「文革期に翻訳された日本映画」

	作品名・中訳名	原作・脚本	監督	初出	評価	訳者	訳作
1	故郷 故郷	原作：山田洋次 脚本：山田洋次、宮崎晃	山田洋次	『キネマ旬報』1972年第591期	1972年キネマ旬報ベスト・テン 3位	石宇	故郷—日本の五個電影劇本（上海人民出版社、1974年6月）
2	啊，无声的朋友们あゝ声なき友	原作：有馬頼義「遺書配達人」 脚本：鈴木尚之	今井正	『キネマ旬報』1972年第578期	1972年キネマ旬報ベスト・テン 18位	同上	同上
3	男人的烦恼— —柴又恋情 男はつらいよ 柴又慕情	原作：山田洋次 脚本：山田洋次、朝間義隆	山田洋次	『キネマ旬報』1972年第582期	1972年キネマ旬報ベスト・テン 6位	同上	同上
4	忍川 忍ぶ川	原作：三浦哲郎 脚本：長谷部慶次、熊井啓	熊井啓	『キネマ旬報』1972年第579期	1972年キネマ旬報ベスト・テン 1位	同上	同上
5	约会 約束	原作：金志軒、 斎藤耕一 脚本：石森史郎	斎藤耕一	『キネマ旬報』1972年第576期	1972年キネマ旬報ベスト・テン 5位	同上	同上
6	朝霞之诗 朝やけの詩	脚本：山内久、 桂明子、熊井啓	熊井啓	『キネマ旬報』1973年10月号	1973年キネマ旬報ベスト・テン 12位	薛毅	摘訳 外国文芸1974年第2期
7	华丽的家族 （第一部） 華麗なる一族	原作：山崎豊子 脚本：山田信夫	山本薩夫	『シナリオ』1973年12月号	1974年キネマ旬報ベスト・テン 3位	上海師範大学 外国語系日本語教研組	摘訳 外国文芸1974年第5期
8	华丽的家族 （第二部） 華麗なる一族	同上	山本薩夫	『シナリオ』1973年12月号	同上	同上	摘訳 外国文芸1974年第6期
9	诺斯德拉达繆 斯的大预言 ノストラダム スの大预言	原作：五島勉 脚本：八住利雄	舛田利雄	『キネマ旬報』1974年8月上旬号	1974年の邦画部門の興行収入第2位。当時の文部省推薦映画。	安可	摘訳 外国文芸1975年第2期
10	小林多喜二 小林多喜二	脚本：勝山俊介	今井正	『文化評論』1973年第11期	1974年キネマ旬報ベスト・テン 13位	斎邁、漳泉	摘訳 外国文芸1975年第5期
11	德尔苏·乌扎 拉 デルス・ウ ザーラ	原作：ロシア人 探検家ウラジー ミル・アル セーニエフに よる同名の探検 記録『デルス・ ウザーラ』	黒澤明	『キネマ旬報』1974年増刊5・7号	第9回モスクワ国際映画祭では金賞；第48回アカデミー賞で外国語映画賞を受賞。第49回キネマ旬報ベスト・テンでは外国映画部門の5位	葉維（葉謂渠）、文潔若	反華電影響劇本「デルス・ウザーラ」

	作品名・中訳名	原作・脚本	監督	初出	評価	訳者	訳作
12	我的道路 わが道	脚本：新藤兼人	新藤兼人	『キネマ旬報』1974年9月上旬号	1974年キネマ旬報ベスト・テン 6位	上海外国語学院日本語教研組	摘訳 外国文芸1976年第1期
13	日全食 金環蝕	脚本：石川達三	山本薩夫	『キネマ旬報』1975年9月下旬号	1975年キネマ旬報ベスト・テン 3位	安可	摘訳 外国文芸1976年第7期
14	沙器 砂の器	原作：松本清張 脚本：橋本忍、山田洋次	野村芳太郎	『キネマ旬報』1975年1月号	1974年キネマ旬報ベスト・テン 2位；キネマ旬報賞脚本賞	葉謂渠	『砂の器』『望郷』：日本電影劇本（人民文学出版社、1976）
15	望郷 サンダカン八番娼館 望郷	原作：山崎朋子 原作： 脚本：広澤栄、熊井啓 啓	熊井啓	『キネマ旬報』1974年11月下旬号	1974年キネマ旬報ベスト・テン 1位；第25回ベルリン国際映画祭銀熊賞を受賞。第48回アカデミー賞で外国語映画賞にノミネートされた。	高慧勤	同上